

映画で学ぶ人権

2020年度 館田ゼミ

映画評論集



はしがき

2020年度1学期集中だった館田ゼミは、今年のテーマを「映画で学ぶ人権」としました。週2回のゼミでは、毎回違った映画をテーマに、レポーターによる報告と質疑応答、何回かごとのグループディスカッションを重ねながら、歴史や日常の中の人権や民主主義について学んできました。新型コロナウイルスのパンデミックの影響で、ほとんどの報告とディスカッションをZoomによる遠隔授業で行うことになり、ゼミ生同士が交流を深める機会を持てなかったのが心残りではあります。

ゼミでは直接顔を合わせることがなかったのに、大変活発に議論が行われました。あまり法律学っぽいゼミではありませんでしたが、それゆえにむしろ、日常にひそむ人権問題や歴史的な憲法の意義について、物語を通じて実感できたのではないかと思います。

半年間のゼミの締めくくりとして、各自が報告を担当した映画の評論を執筆しました。ゼミの議論を思い出しながら評論を読み、もう一度映画を見てみると、また新たな発見があるかもしれません。

2020.8.3 館田晶子

目次

「未来を花束にして」

「ビリーブ 未来への大逆転」

「ピータールー」

「マルクス・エンゲルス」

「こんな夜更けにバナナかよ」

「最強のふたり」

「私はあなたのニグロではない」

「ドリーム」

「月はどっちに出ている」

「パッチギ！」

「ターミナル」

「光州5・18」

「タクシー運転手」

「1987、ある闘いの真実」

「笑の大学」

「バーバー吉野」



未来を花束にして

監督：サラ・ガヴロン

主演：キャリー・マリガン

2015年・イギリス



1912年のイギリス。ロンドンでは、当時の政権に対しての女性の選挙権を要求する運動が先鋭化していた。50年に及ぶ平和的な抗議が黙殺され続け、カリスマ的リーダーであるエメリン・パンクハーストが率いるWSPU(女性社会政治同盟)は、「言葉より行動を」と過激な抗争を呼び掛けていた。その一方で人を傷つけないことを方針の一つとする穏健派も存在した。現代社会の深刻な問題となっているテロ行為とは一線を画す、理性に拠る活動だったことが知られている。階級を超えて連帯した女性たちの願いはやがて大きなムーブメントとなり社会を変えていった。(『未来を花束にして』公式サイトより)

本作品では「女性参政権」と「女性の人権」、「変革」をテーマとする映画で実話をもとに作られており、当時の女性に対する社会的風潮やその現状に対する世間の興味・関心をあらゆる場面で強調しており、いかに仄暗く先の見えない状態にあったかをしっかりと知らしめるような構成となっている。

始まりはガラスが割られる音。本作の主人公であるモード・ワッツはそれが女性参政権運動の過激派によるものだとわかっているうえで極力関わらないようにする。つまりは当時、一般民衆の女性参政権に対する意識はその程度のものであった。求めれば男性女性関わらず煙たがられるし求めなければ何も変革しない。ただただ虐げられその現状に不平不満を言う気にもならないような社会がそこにはあった。しかし、転機は訪れる。公聴会が実施され、あろうことか代読をさせられることになってしまった。そこで自らの境遇を語っていくうえで当時の女性が保有する様々な権利、政治に参加する権利つまりは参政権や自分の職業が生まれながらにして決められていることの不合理性、職業選択の自由など含め女性の人権について保障がなされていないことにより疑問を持ち始めた。

また、作中のセリフでワッツは夫に対し仮に娘が生まれていたら「どんな人生か

な」という質問を投げかけるが、「君と同じさ」という返答を受けすぐにデモに参加する決意を決める。その際一瞬寂しそうな表情を見せた。ここから察するにもし夫が前向きな返答、もしくは娘の幸せを願うような言葉を吐いていたらこの夫婦の未来は変わっていたのかもしれない。そもそもそのような可能性はありもしないのだが。

物語が進むにつれワッツには失うものがなくなっていく。反対に初めは守るものが少なかったが段々と守るものが増える者も現れ始める。そうして運動に積極的立場にあった者の意志を新しい世代、ワッツが受け継いでいくという『行動を起こす』行為そのものの価値を強く訴えているようにも感じられた。

女性参政権は『結果として』認められた。そしてそれは現在にも続く。しかしその根本には大きな意味のある『死』が存在する。エミリー・ワイルディング・デイヴィソンは国王が観覧するダービーにおいて国王の馬であるアンマーにはねられて数日後絶命する。これがきっかけで女性参政権運動は世に大きく知られ世界的に取り上げられることになった。国を変えるには命を投げ出さなければならないのか。自らの幸福追求のためにその主たる目的である自らを捨ててもよいのか。それはまさに『無駄な運動』になってしまうのではないか。いや、ならない。彼女らは運動を続けていくうちに皆『後世』や『同じ境遇の人々』のために運動を行うようになっていく。それは成長であり、『未来を花束にして』の大きなテーマであるとも言える。

作中でもワッツのマギーに対する行動として描かれている。冒頭ではマギーに対するセクシュアルハラスメントを発見した際にワッツは間接的にそれを止めるに留まったが、終盤では強引にでも直接マギーを連れ去りセクシュアルハラスメントが横行する工場ではなく自分が信頼する人に預け颯爽と去っていく。

物語の序盤と終盤にてわざわざ描かれているということはこの映画がこういった『変革』を強調したい映画なのだと推察することは容易である。

最後に、もしもう一度『未来を花束にして』を見る機会があれば是非とも序盤の世間やモード・ワッツの女性に対する『人権』の『考え方』と終盤の考え方の違いやそのほか女性参政運動に携わってきた者たちの運動の『根源』が自分のためなのか、他人のためなのかをしっかりと観察しながら見ていただきたい。

ビリーブ 未来への大逆転

監督：ミミ・レダー

主演：フェリシティ・ジョーンズ

2018年・アメリカ



「私は他に何も望まない。ただ、女の足を引っ張るなと男に言いたいのだ。」

アメリカの現代の女性が法律で守られているのは、この女性が残した功績の恩恵といえるでしょう。彼女の名はルース・ベイダー・ギンズバーク、現役のアメリカ合衆国最高裁判所の判事です。実話をもとに作られており、ルースの男女差別是正に向けて奮闘する姿は爽快、まさに圧巻です。

1970年代のアメリカは‘男女は平等ではない’‘差別は合法’とみなされていました。ルースが大学院へ入学した際は学校長から「男性の席を奪ってまで入学した理由を教えてください」と言われたり、授業で手を挙げてても当たらないことは日常茶飯事。また、弁護士事務所は女性や母という理由で採用されず就職活動が難航。これらの男女差別をなくすために活動するはずが、ルースはその男女差別によって行動を制限されてしまうのです。弁護士を諦め大学教授となったルースは、ある日こんな記事を目にします。それは、「国税庁が親の介護費用の控除の申請を、原告が男性であるという理由から却下した」というものでした。当時のアメリカの税法214項では、介護費用の控除の申請を女性のみ限定していました。これは‘男性に対する性差別’であるとし、ルースはこの判決を覆すために訴訟を起こすことを決めたのです。

ここで注目したいのが、‘男性に対する性差別’という点です。男女差別というと、ルースが受けてきたような女性が恵まれない環境にあり男性の方が優位な立場にあるものと認識するケースが多いと思いますが、この事例ではその逆でした。差別は女性だけではなく、男性もまた差別の対象となる可能性をほらみ、したがって性による差別は男女ともに損をするということをルースは男性判事に訴え、彼らの目を覚まさせようとしたのです。さら

に「すべての国民は法の下に平等」とアメリカ合衆国憲法第14項で規定されているものの、ほとんどの法律では‘女性に家庭、男性に仕事’を前提に作られていました。ルースは男女は同権でなくてはならないとし、したがって税法214項は憲法違反であると考えました。

ルースの約4分間にも及ぶスピーチは男性判事だけでなく国民にまで衝撃を与えました。ルースは常に「全てに疑問を持って」という母からの教えを守っていました。裁判というものは一般的に判例に重きが置かれており、過去の判例が未来の裁判の判決となるというのが裁判における常識です。しかし、時代のなかでつくられた法律は時代によって変化を受けるものも存在します。法律自体を正しいものとして認識するのではなく、本当に正しいものは何なのかを常に疑いをもって考察していたことが、この裁判の勝利へとつながったのです。ルースは100%勝てないといわれていた裁判で最後まで男女平等の信念を貫き通し、アメリカの差別問題の歴史を変えた人物となりました。

この「ビリーブ 未来への大逆転」と関連した「RBG 最強の85歳」というドキュメンタリー映画も付随して見ることでより深く男女差別について考察することができると思います。この映画はルース本人が自ら戦ってきた裁判を語り、どのようにして男女平等への道を辿ったかを知ることができます。男女差別と人権について向き合ってきたルース・ベイダー・ギンズバーグという人物を知ることによって、よりこれらの男女差別問題を深く考察することができると思います。

武田千乃（政治学科・3年）

ピータールー マンチェスター

の悲劇

監督：マイク・リー

出演：ロリー・キニア、マキシム・ピーク、
デビッド・ムースト、ピアース・ク
イグリー、ティム・マッキナリーほか

2018年・イギリス



舞台は1819年。ナポレオン戦争後の困窮した英マンチェスター。深刻化する貧困問題の改善を訴え、政治的改革を求めた民衆6万人がセント・ピーターズ・フィールドに集まった。そこに、民衆運動の鎮圧のため、集会に参加した非武装の労働者階級の市民が、資本家に召集された義勇軍と政府が派遣した正規軍によって武力弾圧された。これが1819年、イギリスのマンチェスターで実際に起きた「ピータールーの虐殺」事件の内容であり、イギリスの名匠マイク・リー監督がこれを忠実に再現したものが「ピータールー マンチェスターの悲劇」である。この事件の結果、多くの犠牲者が亡くなり、数百名が負傷した。また、この事件はイギリスの民主主義において大きな転機となり、イギリスの大手一般紙ガーディアン紙が創設されるきっかけにもなった。

この映画の最大の特徴は、「主人公が存在しないこと」である。弾圧する側は、王室、政治家、軍人、法律家、資本家。弾圧される側は、ジャーナリスト、民主活動家、労働者階級の一家族。それぞれのエピソードを積み重ね、虐殺に至る経緯を明らかにしていくことで物語は進んでいく。主人公と脇役という設定が明確にされておらず、誰の視点かをあえて見せないような作りになっており、限りなく客観的な視点の映画となっている。

映画では、民衆側の集会のシーンが非常に多い。これは、経済状況が悪化し、労働者階級の人々は職を失ったり、上流階級にとって優位な法律が勝手に作られたり、民衆の不満が徐々に募っていた結果、それが爆発したためである。今でこそ、日本では選挙権が18歳になると男女ともに当たり前のように与えられているが、この時代では参政権というものがない。保障されておらず、憲法上の問題も多くあった。集会をするにも常に国家の監視、更にはその群衆に軍事行使が行われ、「集会の自由」も保障されていなかった。無抵抗な群衆に対し、軍事力を行使する場面は1989年の「天安門事件」、最近でいえば「香港デモ」を想起させ

る。義勇軍と騎兵隊による無抵抗の民衆の虐殺を再現したシーンは、見ている人も何がなんやらのパニック状態に巻き込まれるほどの迫力である。このようなカオスが人の命を奪っていき、という状況が鮮明に可視化され、思わず香港デモで市民が暴行される映像が脳裏に映し出された程だ。権力による民主化運動の弾圧は今も昔も変わらない。また、作中ではコート盗んただけで死刑宣告をなされたり、予算の関係でオーストラリア流刑にするのを取りやめ公開鞭打ちにするなど、この時代は裁判官の気分次第で恣意的に判決が変わるようになっていた。そのため、公正中立な裁判が行われず、司法権にも問題があったのである。

マイク・リー監督は、「日本の観客の皆さんへメッセージ」として、「2019年8月16日にピータールー事件が200年を迎えるということで、今こそ映画化すべきだと思いました。この事件は単なる昔の出来事ではなく、現代につながっています。民主主義について、権力を持っている人への疑問をこの映画を通じて考えてもらえればいいなと願っています。」

(公式サイトより引用)と残しています。この作品は、刻々と変化する世界で民主主義とはどうあるべきか、権力者が市民のためにどう権力を行使すべきか、それを一人一人考えなければこのような悲劇が再び起こってしまうことを忠告しているのかもしれない。

今の日本では投票率が低く、20代に至っては30%程度と低い。政治に無関心な人が多いなか、そんな人たちに見ていただきたい作品である。この映画は史実を扱っただけに、予備知識がないと少し難しく感じるものかもしれない。しかし、逆をいえば予備知識があると、より深く物語を楽しめる作品となっている。「ピータールーの虐殺」事件を調べたうえで見ることをお勧めしたい。

佐藤辰洋 (政治学科・3年)

マルクス・エンゲルス

監督：ラウル・ペック
主演：アウグスト・ディール
2017年・ドイツ-ベルギー-フランス



時は19世紀、歴史は激動のさなかにあった。

18世紀から断続的に繰り返される国民と政府との戦いである革命、産業革命以降広がる資本家と労働者との格差との戦い。様々な面の正と負が闘ぎあう時代そんな時代に生まれ後世へ多大なる影響をもたらした男たちカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスこれは、彼らの歴史の物語だ。

近代は産業革命から始まるとされています、しかし昨日まで「中世」今日から「近代」というように歴史はきっぱりと分けることはできません。そしてその分かれ目には新しいイ時代のために戦うもの、古きよき時代や既得権益を守るために戦うものがありました戦いがありました。そしてカール・マルクスらは新しい経済システム「資本主義」によって搾取されてゆく市民のために戦ったのです。

マルクスらの戦いの道は決して平坦なものではありませんでした、産業革命を通じて資本家は力をつけ新しい既得権益をむさぼるものとなっていたのです。資本家もかつては革命によって貴族らによる政治体制を解放させるなど、旧体制に対して戦ったものですが、自身らが体制に組み込まれると資本家らはその状態を甘んじて受け入れ労働者らを道具のように扱い始めるのでした。こうした状況の中でマルクスはかつての革命のように労働者たちに団結して抵抗を行うよう呼びかけるのです。マルクスは労働者による革命を欲しました。そしてマルクスの活動のいかにもありヨーロッパに革命を必要とする機運が高まってゆきました。

そうした流れでマルクスは「共産党宣言」という本を書き上げます、その本の書き出しは「ヨーロッパに幽霊が出る——共産主義という幽霊である」という有名な文章から始まるものであり、これは共産主義を潰そうと古いつくりのヨーロッパ諸国は共産主義を恐れている、今こそ革命を起こすべきである とそうしてこの本の中には革命の必要性や正当性が書かれました。そうしてこの本の最後は民衆を鼓舞するかのようこう綴られています。「共産主義者はこれまでの全ての社会秩序を暴力的に転覆することによってのみ自己の目的が達成されることを公然と宣言する。支配階級よ、共産主義革命の前に恐れおの

のくがいい。プロレタリアは革命において鎖以外に失う物をもたない。彼らが獲得する物は全世界である。万国のプロレタリアよ、団結せよ。」と。

これだけであれば、この映画はただのマルクスの伝記映画です、しかしこの映画にはマルクスの相棒にしてもう一人の主人公であるフリードリヒ・エンゲルスが存在します。この映画においてマルクスが資本家に対抗する純粋な正義感の男と捕らえれば、エンゲルスは自らの家系を否定しながら戦うことになる苦悩の男です。映画冒頭エンゲルスが書く本によって労働者はどのような扱いを受けているかを広く知らしめることになります。またこのような告発を行うというということは自分の家族が非道であると知らしめることでもあり、さらには家庭が資本家であるため労働者も執筆にあまり好意的ではないことから、エンゲルスの活動にはいくつもの障壁があり自身の正義感と家庭の立場という板ばさみの状態がエンゲルスを苦しめたかは想像に難くありません。余談ではありますがこの部分が映画を楽しむ上で一つのポイントであるとおもいます。

彼らの活動の結果は、この映画ではほぼ描かれませんが、共産党宣言が執筆された後フランスで 2 月革命が勃発します、それを皮切りに他のヨーロッパ諸国にも革命の機運が高まってゆきます。そして 18 世紀の産業革命から始まった資本主義 1 色であったヨーロッパに自由主義・民主主義・社会主義・共産主義・ナショナリズムなどの様々な主義が広まってゆきました、そのなかでマルクスの執筆した共産党宣言や資本論は様々な国の考えの中に取り入れられていきました。

このマルクス達の主張は現代の日本国憲法にも見ることができます。条文だと 28 条に当たります、ここには労働三権とよばれる「団結権」「団体交渉権」「団体行動権」三つの権利が保障されています。これにより現代日本では生産手段を持つものによって道具のように使われることを防止する抑止力になっていたり、就労規則を労働者が容認できるものに変えるように要求することができるようになっていくのです。

さらに、日本では憲法 27 条によって勤労が義務付けられています。これに関しては精神的に斯くあるべきというようなものでありそれらを取り締まるような法は存在しません、よってこの憲法は資本家などに対してマルクスらの時代のように過剰に利益を搾取して生活するのではなくしっかり働いて生活しなさいというような資本家に対する過剰な搾取を抑制するというふう読み解くことができこの条文は他国にあるような労働の権利の条文を少し進化させたものであり、過去の教訓が生きている優れた文なのかという様に思います。

最後になりますが、この映画ではこれらの現代では常識となっているものが存在せず、いかに労働者が搾取されていたか、それを覆すことは如何に困難だったのかが見て取ることができます。そうした先人たちの教訓が生きている世界で私たちは今ある制度を上手く活用し、いまある権利を守っていくと共に新たな搾取を生んではならないということを念頭に置き生きてゆくことがこの映画を経験として吸収するにはよい方法なのではないかと考えます。

堀口亮太（法律学科・3年）

こんな夜更けにバナナかよ

愛しき実話

監督：前田哲

主演：大泉洋

2018年・日本



北海道札幌市であった実話をもとに作られたストーリーである。

鹿野は幼い頃より難病の筋ジストロフィーを患い体で動かせるのは首と手だけ。24時間365日誰かの介助がないと生きていけない体にもかかわらず医師の反対を押しきって病院を飛び出し自ら集めた大勢のボラ達と自立生活を送っている。夜中に突然バナナ食べたいと言い出したりする自由すぎる鹿野を介助するボラの1人の田中はいつも振り回される日々。ある日たまたま鹿野宅を訪れた田中の恋人の美咲まで新人ボラに勘違いされてしまう。おまけにしかのは美咲に一目惚れし田中は彼の代わりに愛の告白まで頼まれる始末最初は戸惑う美咲だが鹿野やボラ達と共に時間を過ごすうちに自分に素直になること夢を追うことの大切さを知っていく。

この映画は進行性筋ジストロフィーという難病を抱えた主人公の鹿野靖明とその主人公の自立生活を支えるボランティア達によるヒューマンドラマを描いた作品である。

この映画を見た筆者は作中の登場人物達のセリフから読み取れる障がい者の人権問題について取り上げてみることにした。

例えば本作のヒロインに位置するボランティア学生の安堂美咲の映画序盤に主人公に向けて言った「障がい者ってそんなに偉いの？障がい者だったら何言ってもいいわけ？」と言うセリフについて美咲はボランティアに対しわがままに振る舞う鹿野に疑問を感じて、つい言ってしまったのであろうこの発言。医学生の田中久は「今のはちょっと…」と美咲をなだめるも美咲は続けて「ボランティアだって大切な時間割いて世話しにきてやってるんだよ」と不満そうに言う。このシーンに置ける問題として障がい者と健常者の立場は対

最強のふたり

監督：エリック・トレダノ、オリヴィエ・ナカシュ

主演：フランソワ・クリュゼ、オマール・シ

2011年・フランス



あらすじ

不運な事故で頸椎を損傷し、日常生活のほとんどを介護に頼る大富豪のフィリップ。そして、失業保険を受給する為に、介護人の面接にやってきたドリス。

。失業保険の書類にサインをもらおうと彼はさっさと帰ろうとする。貧困層の過程に生まれ育っていたドリスは、就職先が決まらないことを理由に母親からも見放され途方に暮れるが、フィリップはそんな飾らないドリスの性格に惹かれ、自分の介護者として正式に雇うことに決める。介護の資格も経験も全く持ち合わせていないドリスにとっては未知の領域だったが、舞い込んできた仕事をそれなりにやろうとフィリップの屋敷を訪れる。

容赦ないドリス

介護経験もなければ、業務内容にすら興味のないドリス。麻痺のあるフィリップの足にわざと熱湯をかけたり、チョコレートは健常者用だからあげない、というきついジョークをかましたり、ドリスの振る舞いには本当に容赦がない。しかし、障害者のことを全く知らないドリスだからこそ、車いす対応の福祉車両であるリフト付きの車をみたドリスの台詞もまた容赦がなかった。「馬みたいに荷台に乗せろと？」

車いすのまま乗車できる福祉車両は、確かに実用的で利便性が高いが、バックドアから乗車することは果たして人間的だろうか。障害者だから仕方ないと思っているとそれに気付くことはできない。何の先入観も持っていないからこそ、そんな疑問を口に出来たのだろう。

正反対のふたり

フィリップ：大富豪、美術品やクラシック音楽を好む、頭から下が麻痺している。

ドリス：無職で貧しい、美術品に興味がなくファンクミュージックを好む、五体満足、倫理観が麻痺している。

絆を深めていくふたりだが、趣味嗜好は全く違う。

ふたりでオペラ鑑賞に行けば樹木が歌いだした瞬間にドリスが吹き出し、画廊に行けば落書きのような「芸術」に大金を払うフィリップを本気で止める。

冷静に考えれば、木がいきなりドイツ語で歌いだすもの程シュールなものはない。絵の具の飛沫を付けただけの「落書き」に4万5千ユーロも出すなんて庶民からしてみればとても正気とは思えない。価値観の違いを、時に批判的な言葉すら使いながも、ふたりは楽しそうに語り合う。彼らは、「人間はそれぞれ違うもの」ということを分かっているのだ。寛容であるということは、心地の良い円滑な人間関係を築く秘訣ではないだろうか。

彼は私に同情していない

これは、劇中でフィリップが友人に対して言った言葉である。これは台詞の通りだが、ドリスはフィリップを憐れんでいない。自分を障害者としてではなく、対等な人間として接するドリスとの関係を大切にしている。だから、ふたりの関係には余計な「気遣い」がない。

もちろん必要な気遣いもあるが、それが行き過ぎると目の前に映るのは「障害者」ではなく「障害を抱えてしまっている人」になってしまうだろう。例えば同じクラスメイトに生まれつき足が不自由な生徒がいたとしよう。この生徒への必要な気遣いは急な階段など一人では歩行が困難な場所での補助等であり、それ以上の気遣いは友達を同じ人間から遠ざけてしまう。世の中で誰一人本音で向き合ってくれる人がいなくなったらどうだろう。それは健康な人も障害者も等しく孤独を味わうことになるに違いない。

まとめ

この映画の中で、フィリップは、ドリスによって新しい世界に飛び込むことができ、癒されていく。ドリスは、フィリップによっていつの間にか、教養を学び人間として成長していく。これらの要素は上記のシーン以外からも窺うことが出来る。差別とは、障害とは、環境も価値観も違う人間との向き合い方とは。こういった問いに、とてもユーモラスな、しかし的確な一つの回答が示されていく。

出自も人種も価値観も超えて、このふたりを引き合わせるものは何だったのだろうか。障害も人種も取り払った後に残るのはただの人間である。そういったものをなくしてみると自分にはないものを持っている相手には素直に敬意を払え、相手が出来ないことは自分が補って当たり前というものである。自分がどれほど人間の本質以外のところで左右されているか、この映画で再確認することが出来た。堅苦しい感じで文を綴ってきたが、映画の演出としても俳優たちの演技としてもとても完成されたいい映画だった。一度見ることをお勧めする。

私はあなたのニグロではない

監督：サミュエル・L・ジャクソン

主演：ジェイムズ・ボールドウィン

マーティン・ルーサー・キング

マルコム・X

メドガー・エヴァース

1970年代・アメリカ



私は当ゼミの課題として「私はあなたのニグロではない」を視聴し発表を行った。この映画は、アメリカでの黒人差別問題が取り扱われており、人権や平等であるべき権利が保障されていない「黒人」として生まれてきた人々が、その仕組みを作った白人や政治体系に訴えかけ今世代・次の世代のために、同じ苦しみや劣等感を覚えなくて自由な人間としての誇り高い生き方を目指す運動をするという映画であった。

この映画は物語形式ではなくオムニバス形式で「公民権運動」を行った人物についてフォーカスを当てたうえでそのなかでの運動の中心人物やその周りの人々、迫害を続けてきた白人たちの心や思想の変化等をアメリカの文化の切り抜き等を通して伝えている。特に映画や音楽といったエンターテインメントの中でも黒人が「野蛮」、「白人の奴隷」、「下等民族」というイメージがすり込まれた結果として作品の一端として現れている。黒人が専従の野蛮な人種であるように全裸で奇怪な集会をしている様子を含む描写がある映画や、黒人の権利獲得のため抗議活動している様子をあざ笑った歌詞を含む歌が当時流行していたのだ。

そして作品はアメリカ合衆国出身の黒人俳優であるサミュエル・L・ジャクソンがナレーションを担当し、ジェームズ・ボールドウィンの未完成原稿『Remember This House』と彼の1970年代のメモや手紙に基づく内容となっている。回想で彼の友人で公民権運動の指導者のマルコム・X、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア、メドガー・エヴァースという公民権運動の代表者として活躍していた人物についての人生が紹介される形で進んでいく。マルコム・Xは黒人の人としての権利を求めため、黒人に対して武装をし抗議に臨むよう呼びかけたりしており、後に述べるキング牧師とは対照的な抗議姿勢をとっていた。60年代に入り、人種差別への抵抗の動きが全国的な展開を見せ、ケネディ大統領の暗殺を機に、各地で暴動が勃発するなか、マルコムはハーレムで演説中、ブラック・モスリムの組

織の暗殺団によって暗殺された。マーティン・ルーサー・キング・ジュニアについては一般に「キング牧師」とよばれている人物であり、代表的な抗議を取り上げると、モンゴメリー・バス・ボイコット事件運動がある。概要は、黒人であるローザ・パークスがバス内で白人に席を譲らなかったために逮捕されたもので、キングはこの事件に激しく抗議して運動の先頭に立ったものである。この運動の他に人種差別が激しい町であったバーミングハムにて住民や運動参加者を募り抗議を行ったバーミングハム運動等を行ったが指導者であるキング牧師は一貫して非暴力を貫いており、先ほど述べたマルコム・Xとは対照的な抗議姿勢を貫いていた。その後キング牧師は白人青年によって暗殺された。メドガー・エヴァースは、アフリカ系アメリカ人の公民権運動家であり、NAACP（全米黒人地位向上協会）ミシシッピ州支部委員黒人の有権者登録運動、デモ、黒人差別を行う企業へのボイコット運動などを行った。しかしその後は白人男性によって暗殺された。

彼ら三人の行動や残していった意思を通して黒人の権利獲得に向けて後続の人々が抗議し続けることで何か変わるかもしれないという可能性を残し、活動することの原動力になったことは間違いない。最近においてもアメリカでは2013年以降の抗議活動は「ブラック・ライブズ・マター（黒人の命だって大切だ、黒人の命を守れ）」と称される大規模な運動が行われている。特に黒人男性のジョージ・フロイドさんは5月25日、アメリカ中西部、ミネソタ州のミネアポリスで警察官に首を押さえつけられ亡くなった。フロイドさんが「息ができない」と訴える様子を撮影した動画がSNSで拡散し、怒りが広がった。動画でフロイドさんを押さえつけていた元警察官は第3級殺人などの疑いで訴追された。また、ミネソタ州法の第3級殺人罪は「殺害の意図はないまま、不道德な考えから人命を無視し、著しく危険な行為で他人を死亡させた」場合に適用される警察の暴力に抗議し黒人差別撤廃を訴える趣旨のものであった。この事件をきっかけにアメリカ全土で運動が過激化していった。黒人の人権運動はそれまでも行われていたが、2013年以降は、TwitterなどのSNSで、不条理に黒人の命が奪われた現場の動画が拡散され、ハッシュタグとともにアメリカ全土、国外でもその抗議がさらに広がっている。今後も黒人差別についての問題は残り続けるものであると思うし、なかったことにしてはならないとこの映画を通してのメッセージとして受け取った。映画のなかで「白人は純血を保つために黒人問題を作った。そのせいで罪を犯し怪物となり蝕まれた。黒人が何かをしたとかしなかったからではない。白人が身勝手にも”黒人という役割”を黒人に押し付けたせいだ。」という台詞があったが、まさにその通りで白人が都合よく黒人をニグロたらしめたのであり、それを是正してゆくためには意識そのものを変革させる必要がある。これはアメリカのみならず世界共通認識として問題を捉える必要があり、根深くも醜悪な歴史を繰り返さないための教訓として黒人差別が行われてきた過去理解することがこの映画の伝えたかった本質ではなかろうかと考える。

ドリーム

監督：セオドア・メルフィ

主演：タラジ・P・ヘンソン

オクタビア・スペンサー

ジャネール・モネイ

2016年・アメリカ

全ての働く人々に贈る、勇気と感動の実話



映画の舞台は1961年のアメリカ・バージニア州。アメリカとソ連による宇宙開発競争が繰り広げられていた中で、アメリカ初の有人飛行計画であるマーキュリー計画を支えた黒人女性3人を描いた作品である。1960年代は公民権運動が活発に行われていた時代でもあり、公共のあらゆるものを白人用と有色人種用で分けて使わなければいけないという、現代では考えられないような差別が存在していた。作品中でも、黒人差別や女性差別と受け取れるシーンが多くあり、差別について改めて感じさせられる映画である。

例えば、特別研究本部に配属されたキャサリン・G・ジョンソン（タラジ・P・ヘンソン）は、配属先でコーヒーディスペンサーが分けられたり、白人用のトイレしかなく800メートル離れた黒人用のトイレに行くために40分かけていたシーンが挙げられる。この、キャサリンがトイレに行くシーンは何度か描かれており、強く印象に残るとともに、当時の黒人がどれほど大変な思いをして生活していたのかがよくわかる。しかしながら、当時のアメリカ・バージニア州では、白人と非白人の隔離を認める法律（ジム・クロー法）があり、作品中に描かれていたような、バスや図書館などの隔離も法律で認められていた。メアリー・ジャクソン（ジャネール・モネイ）が入学を希望していた、エンジニアになるために通わなければいけない学校が白人専用であることも、ジム・クロー法によって認められていたのである。

このように作品中では黒人差別や女性差別が多く見受けられたが、それでも主人公3人は実力で認めてもらうことを選択し、差別や偏見の壁に直面しながらも、信頼を得ていく姿はとても快感であった。また、自分たちの能力を信じて立ち向かって行く姿は、本作を見る人の背中を押し、勇気を与えることだろう。

ちなみに、主人公3人は実在した人物ではあるのだが、活躍した時代はバラバラであり、

実際との相違点もいくつか存在する。本作は1961年が舞台になっているが、昇進願いを却下されていたドロシーは、実際には1949年の段階でスーパーバイザーに昇進している。メアリーは、1958年の段階で工学の学位を取得し、エンジニアとして、1953年にNASAの前身であるNACAに配属されている。また、1958年にアメリカ航空諮問委員会(NACA)がアメリカ航空宇宙局(NASA)に改組された際に、白人用の設備と非白人用の設備は取り払われている。別々の時代に活躍した主人公3人を同じ時代に描くことで、前例を作り上げた素晴らしい女性たちが存在していたことや、マーキュリー計画を支えたその3人の偉大な功績を知ることが出来たのではないかと思う。また、NASAの施設内では既に差別的要素は取り除かれていたが、当時の社会の現状を取り入れて描くことで、映画をみた人が差別について考えるきっかけになったのではないだろうか。特に、ドロシーがミッチェルに「もう差別してないわ」と言われ、「そう思い込んでいるだけ」と返すシーンは、差別そのものであると感じた。差別していないと思っていること自体が差別であるし、差別は無意識のうちに存在しているものであると思う。差別的要素が表面上で無くなっても、人々の潜在意識から消えることはないのかもしれないということをこのワンシーンから感じた。

最後に、本作は人種差別や女性差別と見受けられるシーンが多く散りばめられており、差別に対する色々なメッセージが込められている作品である。しかし、差別という重いテーマを抱え、当時の差別の現状を描きながらも、面白おかしく描かれているシーンもあり、軽快で、ユーモアのある作品である。差別が行き交う職場で導き出す数式は、正しく、正確な数式は差別されない点が皮肉で面白いと感じた。また、実際にジョン・グレン飛行士が地球周回軌道を飛行した当時の映像も使用されており、当時の宇宙開発競争がどれほど人々の関心を集めていたのかが伺えた。宇宙開発という壮大なプロジェクトを成功させるストーリーであるが、自分の思い通りの仕事が出来なかったり、上司からひどい扱いを受ける場面では多くの方が共感出来るのかもしれない。また、主人公3人が力強くも繊細で、3人で支え合って差別や偏見に立ち向かう姿はカッコいいと感じた。前例のない中で、やりたいことを貫き、「1人目」として道を切り開いて行く姿は、いまの私たちも見習うべきである。

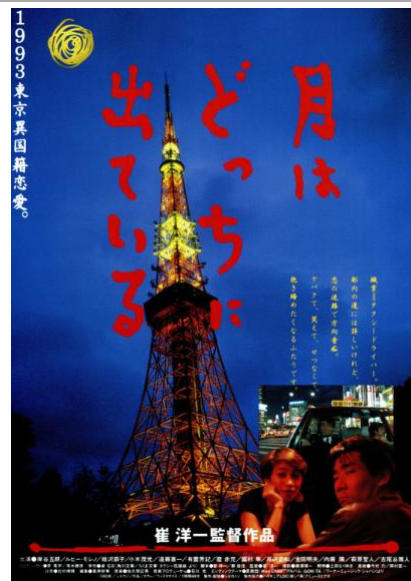
加藤菜緒(法律学科・2年)

月はどっちに出ている

監督：崔洋一

主演：岸谷五朗

1993年・日本



映画の舞台は、多国籍都市・東京。在日朝鮮人のタクシードライバー・忠男を主人公としたコメディ映画である。だが、ただ面白いだけでなく、朝鮮半島の南北分断の影響や、日本人の在日外国人に対する差別的な行動を描いた作品でもあるのだ。

忠男は、同じ朝鮮学校に通っていた世一が社長を務めるタクシー会社で勤務している。ある日、忠男は世一と、同窓生である男性の結婚披露宴に出席する。新郎側が北朝鮮籍の人々、新婦側が韓国籍の人々であった為、新婦の主賓である在日本大韓民国「民団」の偉い方が、壇上で歌われる曲が北朝鮮の曲だけである事に対して、司会者へ不満を言うのである。この場面は、北朝鮮と韓国の隔たりを感じさせるものである。

後日、忠男は、忠男の母が新宿で経営するフィリピンパブで働くコニーと出会う。コニーは、出稼ぎをするフィリピン出身の女性である。また、2人は惹かれ合い、同棲をはじめ。そんな中、忠男の同僚である日本人のホソが、二人の住む家に押し掛ける。また、初対面のコニーに対して「あんた、色黒いな」と言うのである。忠男には、口癖である「朝鮮人は嫌いだけど、忠さん（忠男）は好きだ」と言うのだ。この場面は、在日外国人への差別が感じさせるものである。コニーへの言葉は、ホソとコニーの間に、信頼関係があれば、冗談で言った可能性も考えられるが、二人は初対面であるので、信頼関係はなかったと考えられる為、差別的な言葉であると考えられる。また、忠男への言葉は、朝鮮人への偏見が感じられる。実際に、別の場面で、ホソは朝鮮人の事を、ずるくて、不潔で、教養がない人と発言しているの

で、その気持ちが言葉に出てしまったと考える。

また、映画のタイトルの「月はどっちに出ている」は、忠男の同僚である安保が、道に迷い、タクシー会社に戻れない為、タクシー会社に電話を掛ける場面に出てくる言葉である。安保は「自分は今、どこにいますのでありませんか」と言い、管理課長の仙波が「安保さん、月はどっちに出ていますか?」と聞き、タクシー会社に到着する為には「…月に向かって走って来てください」と言うのだ。また、このセリフは、色々な解釈が出来ると思う。私は、このセリフは、朝鮮半島の南北分断にも通じるものがあると思う。例えば、忠男と朝鮮学校時代から付き合いのある新井が、祖国統一の為には、一人一人が力をつけて団結すべきであると言う場面がある。つまり、民族の力を結集して国づくりをする事が大切であるという事である。従って、朝鮮半島の統一する為には、月に向かって走るように、南北統一を一人一人が目指して、団結して進んで行く事が大切であると思う事が出来るのだ。

この映画は、朝鮮半島の南北分断の影響や、日本人の在日外国人に対する差別的な行動に焦点を当てると、日本人と在日外国人が平等ではないというように、現代でも、解決されていない問題があることに気付けるのだ。例えば、日本では、日本国憲法で、基本的人権を定めている為、外国人の人権も原則として保障していると考えられているのだ。だが、権利の性質上、外国人には認められない権利もある時点で、日本人と在日外国人は平等ではないと言えるのである。

「月はどっちに出ている」は、コメディ映画として楽しむことや、忠男とユニーとのロマンス映画としても楽しむことが出来るが、本質的にある在日外国人の問題について考えることや、タイトルの意味について考えると、より一層、映画を楽しむことが出来るのである。

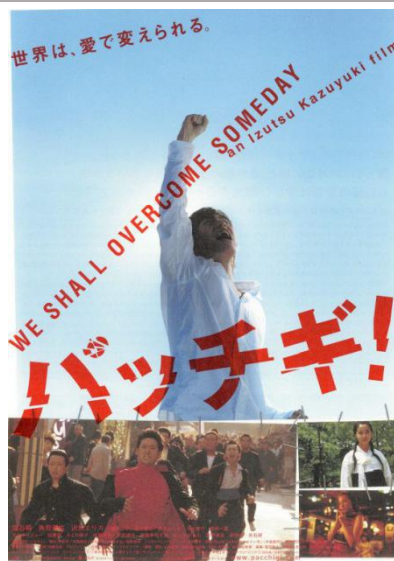
Y.K. (法律学科・2年)

パッチギ！

監督：井筒和幸

主演：塩谷瞬・沢尻エリカ

2005年・日本



映画の舞台は1968年の京都。府立東高校に通う松山康介は、普段から争いの絶えない朝鮮高校にサッカーの親善試合を申し込みに行った際、フルートを吹いていたキョンジャという少女に一目惚れする。最初は不審そうな態度をとっていたキョンジャだったが、自分の為に韓国語を練習したり、キョンジャと一緒にイムジン河という南北に分断された朝鮮の曲を演奏するためギターを練習したりする康介の姿に心惹かれていくというストーリー。その中で、根深い在日差別やヘイトスピーチ問題などに触れながら物語は展開されていく。

映画の中で在日差別を感じさせるシーンや台詞はいくつも盛り込まれているが、その中から特に私が気になったものを抜粋してみる。まず、私が一番に衝撃を受けたのは、キョンジャが康介に対して言った「もし私とずっと付き合って結婚することになったら、康介は朝鮮人になれる？」という台詞。今まで恋仲のような雰囲気であった二人に、国籍という大きな隔たりがあるということを示したと同時に、根強い在日差別が当時の日本にあったこともわかる台詞だ。朝鮮人と結婚することで、康介自身が朝鮮人に対する偏見をもっていなかったとしても、大多数の日本人から差別や偏見の目で見られることをキョンジャは身をもって理解していたので康介にこの質問を投げかけたのではないかと推察できる。二つ目は、康介と仲の良い朝鮮学校の生徒が交通事故に遭い参列した葬儀にて、他に参列していた朝鮮人の老人から「昔は日本人の残飯を食べたり、川の貝を食べて飢えをしのぎながら生きていた、お前のように若い奴は差別のことを詳しく知らないだろうが自分たちはずっと差別されていたんだ。出て行ってくれ」と怒鳴りつけられるシーン。一つ目に挙げた台詞よりも直接的に差別の内容が語られている。当時の在日朝鮮人の人々は働いても満足な賃金を得られず買い物も出来ずにいた、もしくは店から物を売ってもらえなかった

りなどの迫害を受けていたことを推測することができた。

次に、挙げた台詞やシーンを法的な観点から触れてみる。憲法が外国人の人権を保障するかについて、前文にて日本国民は～という節が何度も出てきていたり、条文にはすべて国民は～とあることから否定的な見方をすることもできるが、マクリーン事件の最高裁判決では「外国人は我が国に在留する権利ないし引き続き在留することを要求しうる権利を保障されていない」「外国人に対する基本的人権の保障は、在留の許否を決する国の裁量を拘束するための保障すなわち、在留期間中の憲法の基本的人権の保障を受ける行為を在留期間の更新の際に消極的な事情として斟酌されないことまでの保障を含むものではない」「政治活動の自由に関する憲法の保障は、我が国の政治的意思決定またはその実施に影響を及ぼす活動等外国人の地位に鑑みこれを認めることが相当でないと解されるものを除き外国人にも及ぶ」などとしており、全面的に認められるものではないが、原則外国人にも憲法を適用することが妥当であろうと解した。また、人権というのは人間が人間として持っている当然の権利のことであるので、外国人の人権は認められるべきとするのが当然であると考えられる。更に、憲法14条において規定されている法の下での平等では「人種、信条、性別、社会的な身分又は門地により経済的または社会的関係において差別されない」とあり、劇中で行われていたことは差別であり、あってはならないものだが、実際に差別が起こってしまった以上、失くしていくべきことだと考える。

外国人に対するもののみならず、差別をゼロにするということは実際のところは不可能に近い。しかし、ゼロにすることが難しいからといって最初から諦めるのではなく、少しでもゼロに近づけていく努力が必要不可欠になると考えた。差別を失くすというのはとても漠然とした目標であり、失くしたいと思っている人は多くてもどうしたらいいか、具体的な方法を思いつくのは難しいかもしれない。確かに偏見など考え方は簡単に変えられるものではないが、まずは今回のテーマとした「パッチギ！」然り、差別を題材とした映画や小説を目にしたたり、ドキュメンタリーや判例を見て実際にあった差別を知ることは差別を失くすための第一歩だと考えた。他にも、法務省では人権教室を開いたりしているが実際に過激な差別を行っている人が自分からそのような場所に行くというのは考えにくいことなので、義務教育という大半の人が学ぶ場で人権についての授業をするべきだ。今でもいじめについてなどを道徳の授業で学んでいるはずだが、事細かく学んだことを思い出せる人は私を含め少ないのではないかと考える。大人になっても思い出せるように内容の深い授業を展開し、幼いころから人権問題に触れることが、差別的な考え、発言、行動をする人を減らすために必要なのではないだろうか。

ターミナル

監督：スティーブン・スピルバーグ

主演：トム・ハンクス

2004年・アメリカ



主な登場人物は、ビクター・ナボルスキーを演じるトムハンクス、フランク・ディクソンを演じるスタンリー・トゥッチ、アメリア・ウォーレン役のキャサリン・ゼタ=ジョーンズです。

主役はトムハンクス、そしてヒロインはキャサリン・ゼタ=ジョーンズ、ライバル的キャラもスタンリー・トゥッチとハリウッドの大物が出ている、見たことがある人も多いであろうハリウッドの名作である。

この映画は無国籍になってしまうとどうなるかを、涙あり笑いありの形で考えさせてくれる映画である。

現代のアメリカ。この映画ではあるニューヨークの空港で起こった出来事のお話である。主人公ビクター・ナボルスキーは、クラコウジアというロシア語圏の架空の国から父親の夢を叶えるためにやってきた。

だが、ここで問題が起きてしまう。飛行機に乗ってニューヨークへ向かっている最中に母国であるクラコウジアでクーデターが起きてしまう。それにより政府は崩壊してしまい、アメリカとの国交が断絶してしまう。ビクターは国籍が無くなってしまい入国することが出来なくなってしまったのである。

ビクターが入国するために奮闘し、英語を読めるようになったり、恋をしたり友人を作ったりと物語は展開していく。

筆者はこの映画を通して無国籍の中でもとりわけ難民について取り上げることにした。映画の中ではビクターは最後の場面でクーデターも終わり、国籍も戻り、空港で作った友人のツテで一日入国ビザも得られ、入国ができた。ただし入国の際、本当はディクソンの入国許可のサインが必要であるため、結局違法に入国していることになるが映画のためフィクションとみて目を瞑っておくことにする。

まだ国籍が回復していない時にあるシーンで祖国への恐怖を理由に難民として入国してみてもどうかとディクソンは打診している。筆者もこの方法が妥当で最短で入国できるのではないかと考えたのだがそれは甘かった。現実には難民として申請しても許可されるまでの時間だけでも180日ほどかかるのである。その間は国籍もないので働くこともできない。ではそうなってしまったらどのように生きていけば良いのだろうか。生きていけないだろう。国籍がない間もビクターは空港で建築関係の仕事をしていた。映画ではビクターはこの違法行為などは、バレていないため捕まっていない。

このように本当は違法だがバレずに暮らしている無国籍者は色々な国にいるのかもしれない。フィクションのように楽しく観させてくれた映画だったが、実は無国籍のリアルはこうなのかもしれないと考えさせてくれる映画であった。

村上 敬太（政治学科・3年）

光州 5・18

(原題：華麗なる休暇)

監督：キム・ジフン

主演：アン・ソンギ

2007年：韓国



・映画のあらすじ

1980年5月18日に韓国の光州市(現光州広域市)で実際に起こった、韓国軍と民間人の武力衝突事件、光州事件をモデルに韓国軍に抵抗する人々を描く。ちなみに、韓国での原題『華麗なる休暇』は、韓国軍の非公式な作戦名である。タクシー運転手のミヌが主人公。当初は、韓国軍に対する民間人の抵抗活動を危険だと思い、活動に参加しなかったミヌであったが、弟のジヌがデモ中に韓国軍に殺されたことをきっかけとして、抵抗活動に参加するようになる。そしてミヌが働くタクシー会社の社長であるパクを中心に、民間人側は武器を用いて本格的に韓国軍と戦うことになる。

・注目シーン

当映画では、戒厳令(司法権、行政権、立法権の三権を、軍にすべてまたは一部委任すること)の発令下で行われた、民間人らの政府批判などを目的としたデモ活動の取り締まり、すなわち基本的人権のうちの自由権、とりわけ精神的自由権を政府が侵害している様子や、事件の内容を外部に漏らさないよう、情報統制を行っていたシーンが存在する。これは、国家権力をすべて韓国軍が握ってしまい、誰も止められなかったことが原因であり、韓国軍が国家権力をすべて手にしており、かつそれを恣意的に活用していたという点においては、国家権力の暴走といえるだろう。

また、非常時において韓国軍に国家権力三権が委任されていたことは、当時施行されていた大韓民国憲法に規定されているものであり、合法化されているものであったのも原因に挙げられる。つまり、韓国軍の行動や大韓民国憲法の規定そのものが、国家概念の礎でありルソーらが築いた社会契約論や、民主化運動を通して人々が勝ち取った立憲主義を否定したものである。

・感想

映画を通じて、この光州事件がいかに悲惨なものであったかを若い韓国人や光州事件を知らなかった人に伝えるだけではなく、「このような事件を今後二度と起こさせない」という教訓にしてほしい、という監督の強い意図が感じ取られた。

映画そのものとしては、アクションシーンや感動的なシーンが多く、これらは事件の悲惨さを感情的に訴えるものであったので、憲法学的な視点からは少々見づらいとも感じた。しかし、光州事件前後の韓国の情勢を知り、映画のシーンを丁寧に考察してみると、上記の問題点が明らかになり、事件の本質である「国家権力の暴走」という真実に迫ることができた。

また、この「国家権力の暴走」という点においては、第一次世界大戦後民衆の支持を得て合法的にのし上がり、更にはワイマール憲法の緊急事態条項を利用して独裁体制を敷き、その結果様々な惨劇を招いたナチス政権に通ずるものがあるのではないだろうか。

そして近年話題に上がっている自由民主党の改憲草案、とりわけ緊急事態条項を設けるなどといった条文や、先日ロシアで可決された改正憲法の中身を見てみると、どちらも憲法の本質は政府が国民を拘束するものであって、権力者を拘束するものではない、と定めているように思える。

果たしてそれらは、17世紀から人々が勝ち取った民主主義、立憲主義に適うものであると言えるのだろうか。特に昨今の新型コロナウイルスを巡る状況では、各国政府は閉鎖的な政策を取り、また移動の制限など様々な制限を国民が課されてしまい、どうしても政府が国民よりも強い立場になってしまう。これは、一歩間違えてしまえば独裁体制を招きかねない状況であり、政府には強く、立憲主義や民主主義に適わない政策を行わないことが求められる。

ここで今一度、光州事件やナチス政権で起こった惨劇を顧みて、民主主義、立憲主義、憲法そのものの意義やこの3者の関係をもう一度見直す必要があり、また現状と照らし合わせてみるのが重要ではないかと感じた。

渡辺辰晃（法律学科・2年）

タクシー運転手 約束は海を越えて

監督：チャン・フン

主演：ソン・ガンホ トーマス・クレッチマン

2017年・韓国



本作は1980年に韓国の光州で起こった、いわゆる光州事件の最中を描いており、主要登場人物も実在の人物がモチーフとなっている。

・映画の背景

光州事件とは1980年5月18日から27日にかけて光州市を中心として起きた民衆の反政府蜂起で、デモ参加者は約20万人まで増え、全実権を握る軍が市民を暴徒とみなし銃弾を浴びせた事件のことを言う。

なぜこのような事態になったのかは映画では語られない、もともと韓国では軍事独裁政権に対し、民主化を求める運動が盛んにあった。デモをめぐる対処を巡る対立でKCIA部長によって大統領が暗殺された際に反体制活動をしていた人々が表舞台に姿を現し一旦は「ソウルの春」と呼ばれる民主化ムードもあったが、その暗殺事件の調査に当たった保安司令官全斗煥少将が勢力を固め、12月12日に「肅軍クーデター」を起こして実権を掌握、その中心勢力は、民主化を危険視する軍中堅幹部の「新軍部」であり軍事政権再登場に抗議して高まる学生、市民の民主化要求に対し、新軍部は1980年5月17日に全国に戒厳令を布告し、野党指導者の金大中らを軟禁・逮捕した。その金大中氏は全羅南道出身で、その地元光州において学生デモが起き戒厳軍と衝突した。鎮圧にあたった空挺部隊は街頭で無差別に激しい暴力をふるった。

これが市民の怒りに火をつけバスやタクシーでバリケードを築き、市街地で戒厳軍に激しく抵抗した。映画では描かれていなかったが、市民側も郷土予備軍の武器庫から奪った武器で武装して全羅南道道庁へ立てこもり抵抗した。しかし5月27日に市民側の拠点が制圧され市民側の抵抗は終わった。この一連の過程で市民・学生側に多くの死傷者がでた。

これが光州事件の一連の経緯である。

・政治的な側面

韓国軍の行為を法的な視点、ここでは日本の憲法と照らし合わせて見てみる。

二十一条の集会・結社の自由はデモを武力で制圧しようとしているため守られていない。

軍の弾圧は第十一条の基本的人権の尊重、中でも自由権(国家権力によって侵害・干渉されない)を侵している。そして十九条の思想及び良心の自由も破られているといえる。

劇中ではソン・ガンホ演じる平凡なタクシー運転手は光州に入る前は学生が暴徒化しているものと思っていた。これは政府による厳しい情報統制のためテレビでは光州の暴動は反政府組織によるものと報道、光州の新聞記者も真実を伝えようとしたが差し押さえになった。これも政府が二十一条の表現の自由を抑圧しているといえるだろう。

またテスルというタクシー運転手とジョンユルという大学生が出てきて、当時の光州の人々の日常と感情の動きが彼らを通して見えてくる。軍人によっていずれも殺されてしまうが、彼らの明るい笑顔は当時の光州の人々がこの状況によって何を奪われたのかが観客により鮮明に訴えている。

そんな情報統制にもかかわらず特ダネを聞きつけたドイツ人記者のピーターは光州にタクシーで潜入した。

チャン・フン監督はこの映画の重要なところ(テーマ)のひとつはマスコミが真実を知らせることがどれほど大切かであると語っている。

彼は金のためだと口(身振り)ではいったが、人権と報道の為に闘った正義感の強い人物である。彼の活躍により、光州の真実を世界に伝えることができた。韓国はそのあとも数年間にわたり事実を隠ぺいしたが、やがて写真などがひそかに出回るようになり市民は大きな衝撃を受けた。その後光州の真実とその精神は1987年6月闘争へと受け継がれ、大統領直選制を一途に主張し、韓国の民主主義の成長過程における根本的な精神となったのである。

しかし監督はそれよりも重きを置いたところがあるともいう。

それは一人の平凡な人間の小さな心の変化である。タクシー運転手のマンソプは光州の真実を知ってしまったため再び戻り徹底的に戦う決意をし、感動を呼ぶ。人々の日常を奪った悲劇的な事件の中で、彼らは自分の良心や常識、そして決断に生きた。

この映画は大きなテーマと事件を扱っているが内容は我々のような等身大の人々の視点から描かれる。彼らに感情移入することでこの事件の悲劇性がよりわかるだろう。筆者はこの映画は我々に今一度、人権について考察するきっかけを与えているように思う。

1987、ある闘いの真実

監督：チャン・ジュナン

主演：キム・ユンソク、ハ・ジョンウ、ユ・ヘジン、キム・テリ、カン・ドンウォン、ヨ・ジング、ソル・ギョング、パク・ヘスン、イ・ヒジュン etc

2017年・韓国



○作品概要

1987年1月、全斗煥大統領による軍事政権下の韓国。警察に連行されたソウル大学の学生が取り調べ中に命を落としてしまう。隠蔽しようとする権力側に反旗を翻す検事、事実を報道しようとする新聞記者たちにより、事件は徐々に国民の知るところとなり、韓国全土を巻き込む民主化闘争へと発展していく。

チャン・ジュナン監督が、1987年の民主化抗争を豪華キャストで正面から描いた社会派ドラマの大傑作。第54回百想芸術大賞4部門受賞。

○主な登場人物

- ・パク所長（内務部治安本部対共捜査所長、脱北者） 演：キム・ユンソク
- ・チェ検事（ソウル地検公安部長） 演：ハ・ジョンウ
- ・ハン看守（永登浦[ヨンドゥン]刑務所看守） 演：ユ・ヘジン
- ・ヨニ（延世[ヨンセ]大学新入生） 演：キム・テリ
- ・イ・ハニョル（延世大学生） 演：カン・ドンウォン
- ・パク・ジョンチョル（ソウル大学生、警察による拷問中に死去） 演：ヨ・ジング
- ・キム・ジョンナム（民主化運動家、民主化運動で指名手配され、逃亡中）
演：ソル・ギョング

○あらすじ

1987年1月14日、韓国は全斗煥大統領による軍事政権下にあった。この日、一人の青年が南営洞（ナムヨンドン）警察の一室で死亡した。青年はソウル大学に通う大学生パク・ジョンチョルであり、南営洞警察の捜査所長パク・チョウォンは直ちに火葬するよう命じた。しかし、火葬同意書にサインをするよう求められたソウル地検公安部長のチェ・ファンはふと疑問を抱き、サインを拒否すると警察の圧力がかかることを承知の上で遺体の解剖を命じた。ジョンチョルの死はチェ検事の後輩を通じてマスコミにリークされ、治安本部長カン・ミンチャンやパク所長は記者会見を開き、拷問はなかったと疑惑を完全否定した。しかし、ジョンチョルを担当した医師の証言では遺体は水に濡れていたとの証言があり、肺からは水泡音が出ていたことも明らかになった。

○注目ポイント

映画で注目してほしいのは、登場人物のほとんどが実在の人物であることやセリフのひとつひとつが忠実に再現されている点である。カン本部長やパク所長が記者会見を開いているシーンでパク所長が「机を叩いたら、ウッと倒れた」と言うシーンがある。小学生でも嘘だとわかるようなセリフを平然と言っているのだが、このセリフは実際に言われたとされている。

また、憲法の観点から注目して考えてほしいのは、拷問致死やデモ活動の規制に関する点である。拷問に関しては道徳的観点からも法律的観点からも重要視されるべき問題であるが、当時の韓国では拷問に関する法律はしっかり施されていたのか。また、デモ活動に関して、あるシーンでデモ隊が軍に殴る・蹴るの暴行を受けて鎮圧されていくのだが、民衆が政府に向けて抗議をすることは当時と現代で法律に違いはあるのか、また、十分に保障されているのかなど様々な角度から考えることができる。

○感想

軍事政権による独裁・恐怖政治の中で、自身の仕事に真面目に取り組み、暴走や横暴を許すまじと振り絞った市井の人々の勇気がちょっとした行き違いや偶然などで、簡単に途切れてしまいそうなのに奇跡のようにつながっていく様子は圧巻の迫力がある。大きな権力に対して勇気を持って挑む行動が私たちにも勇気を与えてくれる。

私たちは今、何不自由なく暮らすことが出来ているが、その歴史には未来を明るくするために奮闘した人々がたくさんいたことを忘れてはいけない。この映画にはその雄姿は然り、当時の情勢など様々な視点から見ることで楽しめる作品になっている。

高橋 奎介（法律学科・2年）

笑の大学

監督：星 護

原作・脚本：三谷幸喜

主演：役所広司、稲垣吾郎

2004年・日本



映画・演劇・舞台。これらは現在数多くの作品が世に知れ渡り、中には世界中の誰もが知っているようなものまで存在している。無論、日本で作られた作品も世界中で有名になっているものもある。しかし、日本で多種多様な映画や演劇が作ることができるようになったのは第二次世界大戦以降である。なぜなら日本では「検閲」と呼ばれる制度が存在していたからである。検閲が脚本家・作家に及ぼす影響は絶大であり、数多くの作品が検閲官によって葬られてしまった。

そういった時代の中でも権力に対して立ち向かった1人の舞台作家と、人を笑わせることに何の関心も持たない1人の検閲官とせめぎ合いを面白おかしく描いたコメディ映画が「笑の大学」である。登場人物は、稲垣吾郎が演じる主人公・椿一（つばき はじめ）と、役所広司演じる検閲官・向坂睦男（さきさか むつお）の二名が、笑いをめぐる攻防を行っていく。

舞台は、昭和15年の秋、第二次世界大戦間近の東京・浅草である。劇団「笑の大学」の喜劇作家の椿は、脚本の上演許可をもらおうと検閲課の取調室へ向かった。そこで出会った検閲官の向坂は笑いに対して無関心であり、椿の台本にあらゆる無理難題を押し付ける。一方、椿はその難題をすり抜けかつ笑いの要素を入れて面白おかしい台本を書きあげて提出する。何度言っても笑いの要素を入れてくる椿にはじめは憤りを覚えていた向坂も、椿の台本を訂正していくうちに笑いの面白さに気づき 2人は作品を作り上げていった。そして、台本が完成した時に椿の胸に抱えていた本当の気持ちを聞いた向坂は、椿に最後の難題を出すのであった。

この作品を見て疑問に思ったことは、劇中で椿が言った「これは検閲ではない、本直しだ」というセリフから検閲官の権限はどれほどのものであったのかということである。現実には、検閲をする際に「興行場及興行取締規制」という規制に準じていたが、実際は検閲官の法外の便宜処分が行われていた。ここでいう便宜処分というのは、台本の完成後に審査事前に引っ掛かりそうなセリフの削除・訂正を行うことである。また、脚本検閲独自のものとして、「諸作注意」というものがあった。例を挙げると「台本に接吻とあった場合、演技する際に検閲に引っ掛からないように気をつけよ」ということである。脚本はここで検閲官と交渉・修正して再度認可を求めることができた。作中ではこの諸作注意は「接吻をする際に警察官を登場させ、結果接吻できない状況を作りだす」という偶然のアドバイスによって生み出されたものとなっている。

この作品の大きな特徴は、向坂の笑いというものに対する考え方が大きく変わる様子が描かれていたことである。これは、椿の台本を訂正していくのが楽しくなっていく場面や、椿が自分の出した無理難題を受け入れたうえで自分の想像以上のものを作り出す姿を見て感動する場面から、笑いの面白さに気づき、それを向坂の体の動きや表情が豊かになっていく場面で分かる。また、椿も同様に自分が想像していなかったアイデアをすんなりと出すことができる向坂に感銘を受け、「あなたには作家の素質がある」と絶賛するぐらいの感動した場面から、台本作りを通じて二人の絆が生まれる点も映画の見どころの一つといえるだろう。

映画の時代では太平洋戦争が近づき、それに伴い国民の意識を戦争に向けるために検閲という制度が強化されていた。しかしそれと同時に検閲は、自分の考えを書籍や脚本にして世の中の人に伝えようとする作家にとって大変厄介な制度であったに違いない。そういった困難な状況下を舞台に作られたこの作品は、作家と検閲官が「検閲」の壁を越えて打ち解けていく様子が描かれている。実際にこのような事例が起こったのかはよくわかっていないが、検閲官が脚本などの表現物を添削するには、どの部分がどの規定に引っかかるため訂正されるかを見抜く力を必要とするだろう。つまり、作家と同等の知識量をもって検閲を行っているわけであるから、検閲をしていくうちに作品を作る面白さに気づき、最終的には自ら作品を作り出していた人もいたのではないかと考える。

バーバー吉野

監督：萩上直子

主演：もたいまさこ

2004年・日本



映画の冒頭でおかっぱ頭の少年たちがハレルヤを歌うシーンから始まる。最近話題になったミッドサマーを彷彿させるが、そこまでシリアスなものではなくシュールで面白い雰囲気である。このシーンは印象的なので見る人を一気に引き付ける。予告編を見てない人であれば想像できないシーンであろう。私は予告編を見ていたが、このシーンをみて宗教的な映画なのかと思ったがほのぼのした青春映画だった。

朝ご飯を食べるところや、学校生活のシーンなんかは役者の演技力や周りの風景なども相まって親近感が湧いた。特にもたいさんの演技力が圧倒的で演技というのを忘れてしまう程だった。そんなもたいさんが演じる吉野のお婆さんは、伝統を重んじ、非常に頑固であるが子どもたちからは慕われていて、憎めないキャラクターである。唯一やりすぎだと思ったのは、ハサミを持って転校生の坂上君を追いかけて、強制的に吉野ガリにしてしまうというシーンである。熊本丸刈り事件から考えると、男子はみんな吉野ガリにしなければならないという伝統は憲法違反にはならないにしても、伝統を強制して物理的に危害を加えることは刑法上の問題になってくるのではないか。坂上君が訴えれば吉野のお婆さんは完全に負けるであろう。

少年たちが隣町の美容室に行った際に髪型でどこの町の子かわかってしまうというシーンがあったが、おかっぱ頭にしていることで大人が監視しやすく守りやすいという利点があるが、それだけの理由で髪型の自由を奪ってしまうのはどうなのか。また、この映画では男の子の髪型だけ規制されていて、女の子に関しては特に規制がなかった。これは男女差別

にあたる。ハレルヤを歌うのも、山の神様が嫉妬するからという理由で男の子だけが歌うことになっている。この町では男の子のほうが大事にされている感が否めなかった。

最後にお父さんのセリフで「子どもの髪型より守らなきゃならないものが他にあるだろう」というのがあったが、これに対して吉野のお婆さんは「私にとっては吉野ガリもこの町の風景なんです」と言っていた。確かに伝統は守っていかなければならないものだが、度が過ぎるとそれはただの個人的な趣向であって守っていることにはならないと思う。

林 久令杏（法律学科・二年）

ゼミ生オススメ映画

日本で一番悪い奴ら（監督：白石和彌 2016年）

北海道警察の不祥事を題材にした実録映画です。生真面目な下っ端警察官が裏社会と癒着し、悪徳警官になっていく話です。この映画で注目すべきポイントは憲法第33条の「逮捕の要件」や第35条「住居の不可侵」など刑事捜査についての問題が多数挙げられます。かなり見応えがあるので是非見てみてはいかがでしょうか？（K.M.）

ジョジョ・ラビット（監督：タイカ・ワイティティ 2019年）

舞台は第二次世界大戦下のドイツ。10歳の少年ジョジョは立派な兵士になる為に日々訓練をしていたのだが、ある訓練でウサギを殺すことが出来ず、周りから不名誉な名前「ジョジョ・ラビット」とバカにされてしまう。この映画はコメディだが後半になるにつれ戦争は激化し、シリアスな雰囲気流れ出す。10歳の少年から見た戦争はどんなものなのか映画を見れば分かるでしょう。（K.T.）

5パーセントの奇跡～嘘から始まる素敵な人生～（監督：マルク・ローテムント 2017年）

先天性の病気で視力の95%を失ってしまった青年が、一流ホテルのホテルマンになりたいという夢のために、目があまり見えないことを黙って自身の記憶力や友人の助けをもらいホテルでの研修をクリアしていきます。ハンディキャップがあっても、それに立ち向かう努力に魅せられる映画です。挫けそうな時に勇気もらえる映画です。（K.M.）

図書館戦争（監督：佐藤信介 2013年）

この作品は、本を読む自由が規制された法律がある世界で本の自由を守ろうとする図書隊という組織の隊員に憧れ、自らも図書隊員になろうとする女の子の成長と恋の行方を描いた映画です。戦前の日本の制度である「検閲」の再来ともいえるこの法律に図書隊員達はどのようにしてその自由を勝ち取ることができるのか、是非ご覧になってみてください。（M.K.）

シン・ゴジラ（監督：庵野秀明 2016年）

迫力のある映像や、ゴジラのリアルな描写に注目されがちではありますが、映画内における日本政府のゴジラへの対応は、実際の法律に基づいているそうです。そういった面では、映画内の日本政府の行動を1シーンずつ丁寧に考察してみると、また違った視点で映画を楽しむことができるのではないのでしょうか。（T.W.）

グリーンブック（監督：ピーター・ファレリー 2019年）

映画グリーンブックは黒人差別やLGBT、家族をテーマにして作られたノンフィクション作品となっています。また、ピアニストが主人公ということで音楽も美しく目と耳の双方で楽しめるようになっています。是非とも観る時はカティサークを片手に鑑賞して貰いたいです。（K.S.）

もののけ姫（監督：宮崎駿 1997年）

人間側と自然側、どちらかが悪いと単純に説明できるものではなく、それぞれが様々な価値観や事情を持っているがゆえに、どうしようもない軋轢も生まれてしまいそれが同じ人種や生活圏で必ずしも一致するものでもなかろうと考える。これらのことから、“現代の世界で起こる争いは簡単に解決できない”ということを一考する機会になるのではと思う。（K.A.）

フィラデルフィア（監督：ジョナサン・デミ 1993年）

本作は法廷劇で、エイズとゲイに対する偏見と差別についての物語です。まさに人権と法をテーマに扱っており、法学部生は非常に勉強になります。また、舞台のフィラデルフィアはアメリカ合衆国憲法が制定された場所でそこもミソとなっています。(H.S.)

聲の形（監督：山田尚子・2016年）

聴覚障害もつ硝子と、クラスメイトの将也の出会いから始まる感動ストーリーです。硝子によって将也の価値観が次第に変わっていく姿は見る人の気持ちもきっと変えてくれます。(Y.T.)

この映画で描かれているのは、感動ラブストーリーでも、高校生同士の甘酸っぱい青春物語でもありません。人間同士のコミュニケーションという非常に大きなテーマを扱っています。コミュニケーションの残酷さを嫌というほど突きつけてきます。コミュニケーションの残酷さを徹底的に描き、それでもなおコミュニケーションは尊いのだと結論付けています。それはひとえに、様々なコミュニケーションの形が、様々な「聲の形」があるからにはほかならないのでしょうか。(R.I.)

トゥルーマン・ショー（監督：ピーター・ウィアー・1998年）

主人公・トゥルーマンは、生まれた時から人生の全てを、リアリティ番組「トゥルーマン・ショー」で放送されていた。トゥルーマンが、徐々に撮影されていることに気付いていく…。私は、トゥルーマンが本当の父親に会うシーンが感動的でおすすめです。(Y.K.)

存在のない子供たち（監督：ナディーン・ラバキー 2019年）

この映画は「自分を産んだ罪」で両親を訴えた12歳の少年の物語です。中東における貧困などの社会問題を描いており、人権のような憲法的観点から見ても、日本の子供たちの環境と対比して見てもすごく興味深い作品なのでオススメです。(S.M.)

帰ってきたヒトラー（監督：デヴィット・ヴェント 2015年）

ドイツの作家、ティムール・ヴェルメシュが、2012年に発表した原作を映画化した社会風刺劇。タイムスリップで現代のベルリンに現れたアドルフ・ヒトラーが、再び世間を扇動していくというストーリーです。ヒトラーという人物像を知っていてもそのヒトラーに引き込まれてしまう不思議な感覚がとてつもなくクセになります。(T.S.)

この映画は、第二次世界大戦末期のヒトラーが現代へ転生するという映画です。

現代へよみがえったヒトラーは現代ドイツ人が慢性的に国やその政治に不満を抱いていることを知ります。ヒトラーは現代にかつての強国ドイツを作り出そうと画策するのです。私達はナチス・ドイツの復活を阻止できるのでしょうか？(R.H.)

レ・ミゼラブル（監督：トム・フーパー・2012年）

パンを盗み19年間獄中にいたジャン・バルジャンは、仮釈放で優しく迎え入れてくれた司教の優しさに触れ、心を入れ替えてマドレーヌ市長として生きていくことを誓う。ミュージカル映画なので、迫力のある映像と音楽、美しい歌声に注目して見ていただきたい。(N.K.)

37セカンズ（監督：HIKARI 2020年）

出生時に37秒間呼吸が止まってしまったために、手足に障がいを抱えてしまった貴田夢馬が主人公である。障がい者としてのハンディキャップや葛藤を乗り越えて、ユマが自分が自分であることやこれまでの人生を全て受け入れて肯定する姿が印象的な映画です。(K.H.)

教員オススメ映画

館田晶子

十二人の怒れる男（監督：シドニー・ルメット 1957年）

法学部生なら絶対見るべき、法廷ものの古典です。日本の裁判員制度とアメリカの陪審員制度とは少し違いますが、市民が裁判に参加するとはどういうことなのか、裁判における差別や偏見、多数決民主主義の問題点などについて、考えるきっかけになるでしょう。

日本のいちばん長い日（監督：岡本喜八 1967年）

第二次大戦が終戦を迎えようとする2日間の、日本の政府や軍部の様子を描いた大作です。日本がどのように戦争を終わらせ、その際に軍部はどう行動したのか、緊迫した様子が描かれています。古くて白黒でしかも長い映画ですが、迫力があります。原田真人監督による2015年のリメイク版もあります。

砂の器（監督：野村芳太郎 1974年）

松本清張原作の小説の映画化。小説よりも断然、この映画版の方がいいです。ある殺人事件の捜査が進んでいくにつれて、その背景にある根深い社会的差別の存在が浮かび上がってきます。クライマックスで流れるピアノとオーケストラによる音楽も胸を打ちます。

アミスタッド（監督：スティーブン・スピルバーグ 1997年）

奴隷輸送船・アミスタッド号で起こった奴隷たちの反乱と、その後のアメリカでの裁判が描かれます。奴隷の所有権が争点のひとつになるなど、奴隷制度をとりまく法律問題が映画では重要な要素となっています。奴隷制度に対する戦いを描いた映画のひとつです。

ディリリとパリの時間旅行（監督：ミシェル・オスロ 2018年）

ベルエポックのパリが舞台の、美しく芸術的なアニメ。ニューカレドニアからやってきたフランス人とカナックのハーフであるディリリは、持ち前の勇気と知性と好奇心で、パリの街を縦横無尽に駆け巡ります。キーワードは多様性。当時の実在の人物もたくさん登場します。子どもも勿論楽しめますが、大人が見ても深く考えさせられる物語です。

「映画で学ぶ人権 2020年度館田ゼミ映画評論集」
2020年8月7日発行
北海学園大学法学部 演習Ⅰ・Ⅱ